

前十字靭帯再建術後患者における 早期復帰希望の有無が筋力回復へ与える影響

中畑晶博

はじめに

前十字靭帯(以下 ACL)再建術後のスポーツ復帰の際には、筋力回復が重要な因子の1つである。

患者自身のモチベーションの違いによる術後の筋力回復への影響を調査した研究は、我々が渉猟し得る限り見当たらなかった。

そこで、早期復帰希望の有無が術前時のモチベーションの1つの指標になると仮定し、今回早期復帰希望の有無が筋力回復へ与える影響を調査した。

※なお、当院における復帰時期は Shelbourne knee center のプロトコールなどを参考にし、筋力回復などでの条件を満たした場合、BTB では術後4ヵ月より許可している。

- ①術後期間が十分に経過していること
- ②健患比85%以上の筋力があること
- ③恐怖心がないこと

以上の3つの条件を満たすこととしている。

対象

当院にて2006年8月～2009年11月までにACL再建術を施行した20歳以下115名115膝。そのうちランダムに以下の2群に分けた。

- ①半年以内の復帰を希望する17名17膝
(平均年齢：16.1歳,男5例,女12例,以下R群)
- ②半年以内のスポーツ復帰を強く希望しない16名16膝
(平均年齢：16.8歳,男7例,女9例,以下S群)

※同側BTBを使用したもののみを採用した。

方法

筋力はCSMI社製CYBEXを用い、健患比を3～6ヵ月時においてそれぞれ測定した。

統計には対応のない t 検定を用い、有意水準を 5%未満とした。

また、両群のスポーツ復帰時期についても調査した。

結果

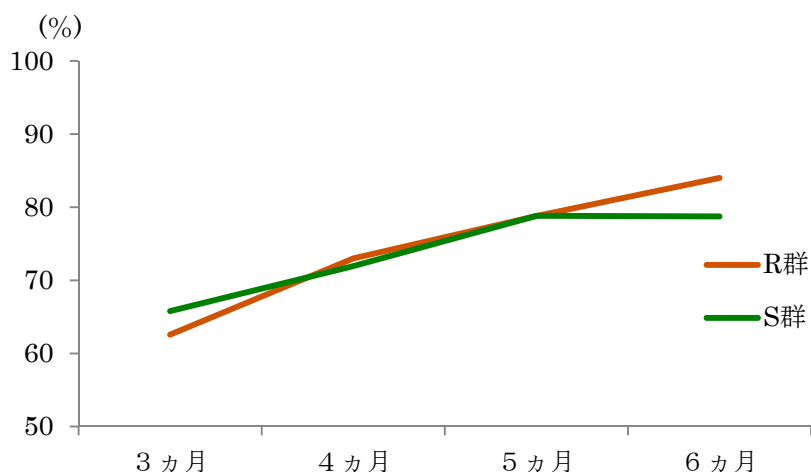


図. 各群における膝伸展筋力健患比の平均値

いずれの時期においても有意差はみられなかった。

しかし、6ヵ月時においては R 群が S 群と比較し、大きな値を示す傾向にあった。

表. 各群の術後復帰時期の平均

	復帰時期
R 群	172 ± 62 日
S 群	208 ± 64 日

復帰時期は R 群が早かった。

考察

本研究では、ACL 術後患者における早期復帰希望が筋力回復へ及ぼす影響は明確にできなかった。

①術後 4,5 ヶ月時においてはほぼ平均値に差はみられなかった。

→術後 4,5 ヶ月ぐらいでは、術前時のモチベーションは大きく影響しない？

→術後のモチベーションの維持、トレーニング指導が大事？

②術後 6 ヶ月時では有意差はないものの、両群間に差がみられた。

→復帰目標時期が近づいた R 群のモチベーションが上がった？

→両群の復帰時期の差が影響？

今後の課題

症例数の増やすことや筋力以外の評価
(精神面に対するアンケートの実施など) を考える。

